

## きずなと努力でつかんだ 最優秀賞

さて、ここで少し時計の針を戻そう。名谷が全国大会を目指し挑んだ第52回西部地区高校演劇祭が開かれたあの日に。

同演劇祭は、昨年の6月25日、26日の2日間、西部地区の高校8校が参加し開催された。日野高校演劇部は、大会一日目に上演することとなった。

彼女が苦勞の末、作り上げた作品は「飛べ、鳥野高校演劇部」。ある女の子が部員数0人の演劇部に入部し、全国大会を目指す物語



▲県大会への切符を手にし、喜びに沸く演劇部

今年1月、名谷本人に3年間を振り返って話を聞くことができた。8年ぶりの県大会出場を果たした演劇部の快進撃は、惜しくも中国大会への切符を逃し止まってしまうたそうだった。しかし、彼女にはやりきった達成感と充実感で満たされていた。「仮に全国大会への切符を手にしても、私たちは出られないんです。でも、私たち

だ。幾多の苦難を涙あり、笑いありで乗り切っていく様は、等身大の彼女を映し出しているようである。

自信はあつたが不安と隣り合わせだった彼女に届いた結果は、最優秀賞。県大会に出場できる3校のうちの一つに選ばれたのだ。達成感とともに流した涙には、仲間と共につかんだ喜びと新しくできた地域とのきずなが刻まれていた。

**自分で作った壁なんて簡単に乗り越えられる。積極的に地域へ出かけてほしい**

の思いをつなげたかった」。そう話す彼女に、後輩や将来、日野高校を目指す中学生に伝えたいことはないかと聞いてみた。

“地域のひととの間に壁を作ってほしくない。色んな経験をして人間性を磨いてほしい”

彼女は続けて、「高校生は地域の人に嫌われていると勝手に思い込んでいたけど、そうじゃなかった。いつも私たちが優しく見守ってくれている。だから、もっと積極的に話しかけてほしい」とメッセージを送った。

以前、日野高校の授業（フィールドワーク）で地域の協力者に話を聞く機会があったが、町の人も高校生などどう接していいかわからないという意見も少なくなかった。

誰にでも先入観はあるだろう。そこで線を引いてしまえば、それはやがて大きな壁になってしまう。しかし、それは自分で勝手に引いた線だ。どちらかが一歩を踏み出すことで簡単に乗り越えられる。そのことに彼女は身をもってたどり着いたのだ。

**無駄なことなんてない人となることが自分で自分に自信を持つてほしい**

3年間でさまざまなことを経験し成長した名谷。彼女が地域とのつながりの中で得たものとは何だったのだろうか。

彼女は、「人とのつながりで自分に自信を持つてたこと。信じれば報われるし、無駄なことなんて一つもないって気付いた」「嫌な事だつて必要で、それが結果につながっている。これからも自分の選択を信じて進んでいきたい」と笑顔を見せる。松本さんや佐野さん、さまざまな地域の人と出会う中で、普通の高校生活では決してできない経



▲江府町の企業と共同開発した商品や町特産品を米子しんまち天満屋でPR。こうした地域での活動が生徒の成長につながっている

験をしてきたのだ。

そんな彼女は卒業後、演劇の道を目指し、上京する予定だ。「名谷にはその道しかないよ」と仲間や家族に背中を押されての選択だ。高校や地域で学んだことを自信に変えて彼女は今春、旅立ちの時を迎える。

**“地域で人を育てる”**

**日野高校だからできること**

“人間にとつて最大の贅沢とは、人間関係における贅沢のことである”（サン|| テグジュペリ）

人とのつながりや縁が、やがて大切な人間関係をつくり、自分を支えてくれる大きな財産となっていく。これから社会に出かけていく彼女らに

とって、自分で学び考える力が必要で、それを教え与えてくれるのがまさに地域なのだ。そして、鳥取県西部の中山間地域にある唯一の高校である日野高校を、地域・高校・行政が手を取り合い、輝ける場にしていくことが私たちに与えられた使命かもしれない。

**地域にも少しずつ変化が。坂をのぼった先には明るい未来が待っている**

『教育』は、学校の中だけで行うものではないですよね。家族や地域の皆さんの力が絶対に必要。生徒は地域の皆さんから学び、一緒に考え、最後には、自ら羽ばたいていかなければなりません。そのため力と勇気を生徒に授けてあげてください。地域で人を育てる。ことについて、片平コーディネーターは、以前そう話していた。高校の魅力化を目指し、コーディネーターが誕生して、まもなく3年。少しずつだが、地域も生徒も変わりつつある。

日野高校農業コースの実習でできたおからや野菜などを使って新たな特産品を作ろうと、日野郡内の企業が協力し商品開発を続けている。す

でにエゴマ味噌や豆腐ドーナツなどの商品が開発され、日野高シヨップや町内外のイベントなどで好評を得ている。今後は、商品開発のアイデアを生徒が自発的に行っているよう計画中大という。

2年次に行く職場体験もその一つ。来年度から生徒を受け入れる日野郡内の企業や団体などの数を増やす予定だ。米子市内からの通学者にも地域とかわつてもらい、より地域に根ざした教育や郡内への就職につなげることがそのねらいだ。

少子高齢化や人口減少が進む中、地域には次世代を担う人材の育成、高校も地域連携を生かす体制づくりなど、さまざまな課題が山積みだ。一見すると、地域や日野高校の未来は下り坂に見えるかもしれない。しかし、地域資源や人材を生かした今の歩みを止めなければ、いつか振り返った時、それは上り坂だったと気付く時がきつとくるはずだ。

**いま、時代が求める人材とは？ 地域・高校・行政が手を取り合う時が来ている**

2020年からセンター試験が廃止されることを知って

いるだろうか。文部科学省主導の大学入試改革により、現在のセンター試験が廃止され、「大学入試希望者評価テスト(仮称)」がスタート。従来の知識重視の試験から、思考力・判断力・表現力を問う試験に変わるといふ。卒業後の進路として、就業が多く占める日野高校にとって、関係のない話というわけではない。思考力や判断力、表現力を備えた人材を社会が求める時代を迎えているのだ。だからこそ、日野高校が育てたい「自ら学び考える」人材と同じといえるだろう。

だからこそ、今回の取材を通し、今の歩みを止めてはならないと確信した。高校は「人とかかわる力」を持った人材の育成、地域には若い人にまちを元気にしてもらいたいという思い、そして、行政は地域と高校の連携によるまちの活性化を期待している。それぞれ求めるものが違って、子どもたちの未来や高校の魅力化に向かって、共に手を取り合い歩み続けていくことが重要だ。それが、いつか大きな花を咲かせると信じて――。

